

一般選抜試験 (A日程) 問題

現代の国語 (六〇分)

(家政学科、美術表現学科)

第一問 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

技術一般が、極めて強く文化に依存してきたことは、すでに触れた通りである。しかし、近代(産業)技術は、そうした文化の差を超えることができるのではないだろうか。

確かに現代の産業技術の一部は、ほとんど無人化された工場の場合が典型的にそうであるように、\*ベルツの言い草ではないが、<sup>1</sup>切り花のように、どこへでも移植可能と言えないこともない。しかし、そうした無人化された工場は、建設地を選ばないといっても、それで、その技術が当の現場に根づいたことにはならない。そうした現場で、現地雇いの人々が働く機会は、計器の見張り程度の単純な現場で、真の意味での運営・管理は任され得ない。

四半世紀前のことになるが、国連大学が「近代化——日本の経験」という国際シンポジウムを開催したことがある。主としてアジアの途上国からの参加者を相手に、日本のスピーカーが、近代化の経験を語るという企画であった。水俣をはじめ、時あたかも日本社会の公害問題が、最も深刻な様相を見せているときだったこともあって、日本側の「良心的」なスピーカーたちは、そうした日本の轍を踏まないように、熱心に訴えた。<sup>2</sup>ところが途上国からの反発は思いのほか激しかった。多くの参加者が、自分たちはそんなお説教を聞きにきたのではない、日本がどうして公害を生み出すほどの近代産業を構築し得たのか、そのミラクルの裏にある秘密をこそ学びにきたのだ、とこもこも論難

したのであった。

もちろん今では事情がすっかり変わっている。その上、そうした機会に国際会議に参加する人々が、当の途上国の民衆のこころをそのまま代弁していたわけでもない。そうした人々は、彼等の国では指導者層に属し、自分たちの社会の民衆を近代化に向かつて動くように日夜苦勞を重ね、あるいは、それがなかなか実現しないことに苛立っている、というのが実状であって、日本のスピーカーの発言は、そうした人々の感情を逆撫<sup>2</sup>することになったのである。

この出来事は、近代化という大きな文脈のなかで考えるべきことであって、近代技術、ましてや産業技術それ自体についての問題点ではないかもしれない。しかし、科学が、とりあえず日常の文化からある程度離陸し、あるいは離脱して、それなりの「普遍性」を獲得したかに見えながら、基本的には個々の科学者共同体の内部で自己完結し、自己閉鎖的であるのに反して、言い換えれば、その限りにおいて、一般の人々の生に直接は関わらずに済ませられるのに反して、技術は如何なる場合でも、その生活圏に住む人々の生と直接切り結び、人々の価値観や人間観、あるいは死生観を反映するものとならざるを得ない、という点で、科学とは事情が異なっていることを無視するわけにはいかないのである。

もちろん第Ⅱ章でも明らかにしたように、現在は科学もかなり変質した部分を抱えており、研究それ自体はともかく、それが行われる形態や、そこから得られる科学的知識の社会的利用に関して、従来のよ

うな自己完結性や自己閉鎖性<sup>③</sup>がカンテツできなくなっていることは確かである。そしてそういう状況では、科学もまた<sup>3</sup>技術のありように近づいているという指摘もできるだろう。また化学(正確に言えば「有機化学」だろうが)のように、一九世紀の制度化の当初から、すでに「技術」的側面を見せていた科学の分野もないではなかったから、ことはそう単純ではないとも言える。

さらに、技術は常に目的を持つものであるから、目的達成に関する「B」によつて、限定された意味ではあるが「普遍性」を持つ、という点を指摘しなければならぬ。例えば一九世紀アメリカの風土のなかから立ち上がった「アメリカ的製造方法」を考えてみよう。

一九世紀初頭のアメリカは、例えば銃器もほとんどがヨーロッパからの輸入に頼っていた。そして、それらの銃器は、職人が一挺一挺手作りで製造したものだ。熟練した職人層が手薄だったアメリカでは、大量の銃器の調達は大陸の力を借りなければならなかったからである。

しかし、一九世紀初頭、アメリカ東北部の銃器製造業の間に、部品の標準化という着想が生まれた。規格を統一して、同じ部品を大量に生産し、それらを組み立てることで、小銃や拳銃を製造すれば、<sup>④</sup>ソシヨウによつて失われたものから、<sup>⑤</sup>ケンゼンな部品だけ集めて組み立て直すことも可能であり、また品質管理、製造過程のライン化などが容易になる。「ライン化」というのは、牛の解体作業から思い付かれた、<sup>④</sup>という言い伝えがあるが、真偽はともかく、こうしてアメリカの銃器産業は、次第に「ライン化」した製造方法を採用するようになった。

この状況は次第に他の業種にも普及していくことになる。自動車、時計、ミシンなどの産業が次々にこうした方法へと切り替えていき、一九世紀半ばには、それはヨーロッパにも「アメリカ的製造方法」として知られるようになった。最終的には、二〇世紀初頭のフォード(モデルT)のような自動車産業で目覚ましい成果を挙げることになるこの方法は、しかし、効率という点で抜きんでいたために、ヨーロッパ

パにも普及し、かつその後の近代産業技術の基本を形づくることになった。つまりある意味では「普遍化」したのであった。

出典 村上陽一郎 『文化としての科学／技術』より

\*ベルツ……エルヴィン・フォン・ベルツ 一八四九年～一九一三年

ドイツ帝国の医師で明治時代に日本に招かれたお雇い外国人のひとり。

問一 ①～⑤のカタカナは漢字に直し、漢字はその読みをひらがなで書きなさい。

問二 切り花のように、どこへでも移植可能とはどのようなことを喩えて言ったものか、本文中から適切な言葉を八字で抜き出して答えなさい。

問三 <sup>2</sup>ところが途上国からの反発は思いのほか厳しかったのはなぜか、その理由を説明したものととして適当なものを、次のア～オのうちから二つ選んで記号で答えなさい。

ア 日本が近代化の見返りとして公害問題や地球温暖化を生み出したことに対する怒りから。

イ 公害問題の深刻さを話の中心に据えて肝心の日本の近代化の秘訣を隠そうとしたから。

ウ 日本型経済成長は公害を引き起こすことから途上国の模範にはならないと失望したから。

エ 公害を生み出したことよりも日本が近代産業を構築した話を聞いて学びたかったから。

オ いかにも自分たちの国民を近代化に向けて動くようにするか苛立った思いがあったから。

問四<sup>3</sup> 技術のありようとはどのようなものか、それを示す部分を本文中から抜き出し、その始めと終わりそれぞれ五字で答えなさい。

問五 次の(1)、(2)の問いに答えなさい。

(1) <sup>A</sup> そうした文化の差を超えることができるが、次の文はこのことを簡潔に言い換えたものである。空欄に入る適切な言葉を、本文中から漢字二字で抜き出しなさい。

□ 化でできる。

(2) 本文中の <sup>B</sup> □ に当てはまる漢字二字の熟語を本文中から抜き出して答えなさい。

## 第二問 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

すでに述べたように、日本の人々にとって自然とは、客観的な、あるいは人間の外にある自然体系のことではなかった。それは自分自身<sup>①</sup>が還って行く場所でもあり、自然に帰りたいという祈りをとおしてつかみとられていくものでもあった。

とすると、その自然とはどのようなものであったのか。

すでによく知られているように、かつての日本では自然はジネンと発音されていた。シゼンという発音が一般的になったのは、明治時代の後半に入ってからである。英語のネイチャー、フランス語のナチュールを日本語にするためにシゼンが使われるようになった。その意味でシゼンは外来語の訳語である。

ジネンはオノズカラ、あるいはオノズカラシカリという意味の言葉である。今日でも私たちは「自然にそうなった」とか「自然の成り行き」という表現を使うが、これがジネンと読んでいた時代の意味の名残りだと思えばよい。

このようにみていくと、自然に帰りたいという人々の伝統的な思いは、シゼンに帰るといふことより、ジネンに帰る、つまりオノズカラの世界に帰りたいという思いだったことがわかってくる。オノズカラのままに生きたい、ということである。

① 自然(ジネン)を訓で読んだときのオノズカラシカリ(ナリ)とはサカイがない、ということであろう。有意ではない、といつてもよい。自我の働きから生ずる意図がない、あるいは「我(われ)」がない、と表現することもできる。

そしてこの気持にも仏教が言葉を与えた。人間は自我があるから「我(われ)」にこだわる。<sup>②</sup>我執のあるのが人間である。だから「我(われ)」の欲望をもち、「我」を主張して争い、悲しむべき凡夫に堕ちていく。煩惱は、「我」をもつことそのもののなかにある。だから煩惱を捨て

るとは「我」を捨てることだ。そして「我」を捨てたあり方とは、すべてがオノズカラのままに生きることだ。オノズカラのままに生きることによって、人々を救<sup>③</sup>し救う。すべての人を。ここで発想は\*大乘仏教と結ばれる。

もつとも、このようにみていくと、ジネンという言葉でシゼンと読んだうで、ネイチャーやナチュールの訳語にしたのはかなり妥当<sup>④</sup>だったということがわかる。なぜならもつともジネンなものは自然(シゼン)だからである。自然(シゼン)はすべてがオノズカラのなかに存在している。シゼンとジネンは同じではないが、シゼンこそがジネンなのである。

I ジネンな生き方ができる自己に戻りたいという気持を、シゼンに戻りたいと表現しても差しつかえない。人々はジネンに帰ることによってシゼンに帰ったのである。あるいはシゼンに帰ることによって、ジネンに帰ったのである。

人々の伝統的な意識では、このようにジネンもシゼンも人間の外にある客体ではなく、いつかは人間が手に入れたい、そしていつかは手に入る世界としてとらえられていた。ヨーロッパの伝統思想のような自然と人間の二分法は成立しえなかった。だから明治に入って外来語の「自然」を日本語に訳さなければならなくなったとき、訳者は困った。人間の外にある客観的な体系という外来語の意味するところの「自然」が、日本語にはなかったのである。

II 今日の私たちには、ジネンよりもシゼンの方がわかりやすい。それは私たちの精神が近代化したから、あるいはオウベイ化したからである。<sup>⑤</sup>自然保護などという言葉を平気で使えるほどに、私たちの自然観は変わった。

オノズカラとしてのジネンは、シゼンの世界でもあり、人間が「祈り」をとおしてみつけた世界である。\*霊の穢れという思いが、それからの救済を求めて「祈り」をつくり、ジネンをみつけたさせた。

Ⅲ 社会が近代化していくと、人々は自然（シゼン）を自然（シゼン）としてみるようになっていった。自然（シゼン）は人間から分離し、自然（シゼン）という客観的な体系になっていった。

この変化が、一九六〇年代に入ると、最終的に、村のなかでもおこっていたのではないかとある人々は考える。戦後の経済社会は、農地を客観的な生産の場へと、森林を客観的な林業の場へと変えていった。水や川は客観的な水資源になった。こういう変化が村でもおこっていた。

シゼンのなかにジネンをみなくなったとき、そして自分たちの帰りたい「祈り」の世界をみなくなったとき、自然と人間の関係は変容した。この変容が、人間がキツネにだまされない時代をつくりだしたのではないかというのが、六番目の説である。

出典 内山節 『日本人はなぜキツネに

だまされなくなったのか』より

\*大乗仏教……出家者に限らず在家者を含めた一切の衆生の救済を掲げる仏教宗派の総称。

\*霊の穢……かつての日本は、生きていく過程を自己の霊が穢れていくことだと考えていた。

問一 ①～⑤のカタカナは漢字に直し、漢字はその読みをひらがなで書きなさい。

問二 シゼンとジネンは同じではないとはどういうことか。そのことを説明した次の文の(1)、(2)の(1)には二字で、(2)には五字で、それぞれ本文から適当な言葉を抜き出して、説明文を完成させなさい。

(説明文)

ヨーロッパの伝統思想では、シゼンは人間の世界からは分離した(1)的な世界であり、利用の対象であった。それに対して、日本の人々のジネンは(2)の世界に生きることを指し、それは自分自身が帰っていく場所であった。

問三 I、II、IIIに入る語の組み合わせとして適切なものを、次のア～オの中から一つ選び記号で答えなさい。

ア	I	しかし	II	なぜなら	III	ところが
イ	I	さて	II	しかし	III	つまり
ウ	I	ゆえに	II	さて	III	なぜなら
エ	I	ゆえに	II	しかし	III	ところが
オ	I	そして	II	しかし	III	つまり

問四 自然保護などという言葉が平気で使えるほどに、私たちの自然観は変わったとあるが、どのように変わったのか。六十字以内で説明しなさい。

問五 この文章には、過去の日本人の、自然（ネイチャー）やナチュラルの意味する自然）に対する独特の見方が描かれている。あなたはこのような自然観についてどう考えるか。本文の趣旨に沿いながら百二十字～百六十字以内で述べなさい。

一般選抜試験（A日程）解答例

現代の国語

（家政学科、美術表現学科）

第一問 問一

①	てつ
②	さかな（で）
③	貫徹
④	損傷
⑤	健全

問二

建
設
地
を
選
ば
な
い

問三

エ
オ

問四

（始め）
技
術
は
如
何
ゝ
（終わり）
る
を
得
な
い

問五

(1)
普
遍
化
で
き
る
。
(2)
効
率

第二問

問一

①	作
	為
②	が
	し
	ゆ
	う
③	ゆる
	（し）
④	だ
	と
	う
⑤	欧
	米

問二

(1)
客
観
(2)
オ
ノ
ズ
カ
ラ

問三

エ
---

